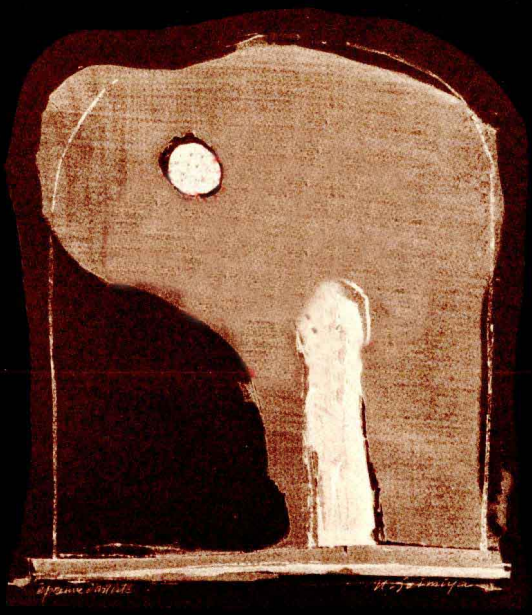
三枚目の幸福

古山高麗雄

三枚目の幸福

古山高麗雄



河出書房新社

三枚目の幸福

昭和四十九年三月十日　初版印刷
昭和四十九年三月十五日　初版発行

著　者　古山高麗雄
発行者　中島隆之
発行所　株式会社河出書房新社
東京都千代田区神田小川町三ノ六
振替口座（東京）一〇八〇二一　電話二九二一三七一一

印　刷　暁印刷
製　本　中西製本

©1974　KOMAO FURUYAMA

目次

I

沖縄は帰ってくるけれど　9

元伍長より軍曹どのへ　44

サーカス——その光と影　71

馬と人と大地の祭　95

II

競馬の愉しみ　111

競馬で個の自由を　115

死人が出るまでは守勢　127

エラい人の発言の虚しさ——たとえば大学授業料の値上げについて

「モダンタイムス」の羊の群　151
恥ずかしながら　153
PCBよりこわい　157
ありえない話――〝終末〟のムード　160
まあまあのゆとり　165

Ⅲ

三枚目の幸福　171
私の処女作　180
小説とモデル　182
実の部分と虚の部分　186
二十五年間の沈黙　NHK放送　188
《生き方》への決意――江藤淳　198

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

『ガダルカナル戦詩集』のこと　213
家――安岡章太郎　218
〝劇作家〟遠藤周作――『メナム河の日本人』　221
李さんとの出会い　223
トルストイの長靴　226
作家の試写室Ⅰ――ユナイト映画「日曜日は別れの時」
作家の試写室Ⅱ――松竹映配「ウイラード」　235

Ⅳ

ブタニーと銭投げ　243
ハンドルのついた電話　245
三高に入った年　250
ささやかな放蕩　254
あの手の感触　259

「プレオー8の夜明け」の日々 262
私と教科書 266
美術が遠ざかる 271
マイカーは悪？ 274
新義州の人びと 277
文房具の贅沢 281
執筆五分前 284
あとがき 283
掲載誌・紙一覧 289

装画　清宮質文
題字　杉本潤二

三枚目の幸福

I

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.

沖縄は帰ってくるけれど

昨臘三十日から正月の八日まで、沖縄に行って来た。

『諸君！』にルポルタージュを書くことになったからである。『諸君！』というのはたいへん大らかな雑誌で、あたかも沖縄問題でジャーナリズムが騒いでいる最中だというのに、一切注文をつけない。たいていの雑誌は、ひとことぐらいは、何を狙えだとか、こういうところを見て来てはどうかだとか、注文をつけたりアドヴァイスをしたりするものである。ところが『諸君！』は、ひとことともそういうことを言わない。

私は、不安になって来た。私が自分の構想で、書くに価することが書けるかどうか、実を言うと自信がない。私は、自分の才のなさを、旅行の日程の短さに転嫁した。わずか十日間ばかり沖縄を歩いたから、といって、何を見ることができるだろう？

そんなことははじめからわかりきった話であり、もともとこの連載の第一回に沖縄を希望したのは、私のほうからだったのだから、勝手な話である。私はしばしば、持ち前の無計画な性格から、

自分をこのような状態に追い込んでしまうことが少なくないが、しかし今度の場合は、出発前に本を読みすぎたということもあるかもしれないと思うのである。

私は、仕事だと思って、沖縄に関する本を可能な限り読んでみた。そして読んでいるうちに、だんだん憂鬱になって来た。沖縄のルポを書くとすれば、基地だの、自衛隊だの、沖縄返還協定だの、そういったことに触れないわけにはいかないだろう。それは私がそういったことの論者として稚拙であっても、自分の思った通り感じた通りを書けばいい。しかし、またまた私は、打ちてし止まんの日本精神に圧迫された。

私が出発前に熟読もしくは速読したのは、次のような本である。

『沖縄問題二十年』中野好夫・新崎盛暉著。
『沖縄ノート』大江健三郎著。
『沖縄黒書』沖縄返還同盟編。
『沖縄の民衆意識』大田昌秀著。
『基地沖縄』琉球新報社編。
『沖縄に生きて』池宮城秀意著。
『世界』七一年八、九、十、十一月号所載の沖縄に関する記事。
『中央公論』七一年七、八、十、十一、十二月号。七二年一月号に所載の沖縄に関する記事。
『時代』七一年十一月号、沖縄に関する記事。

新聞は、あらためて復習する余裕がなかったけれど、ああ、私は、本の選定を誤ったのではないだろうか。これらの大半は、わかりやすく言えば、アメ公帰れ、佐藤政府を倒せ、本土よ反省して沖縄にあやまれ、という姿勢で声高に書かれた論文である。

私は、集団が異口同音に一つことを唱えるとき、声高に正義が主張されるとき、亀の子のように首をちぢめないではいられない。そして、おそるおそる再び首を伸ばして、何がこぼれ落ちたかを見たいと思う。ところが、あまりに、圧政だの、屈辱だの、怒りだの、踏みにじるだの、差別だの、収奪だの、軍国主義だの帝国主義だの、闘争だの、支配だの、そういう言葉がいっぱいに詰まった発言にばかり接していると、なにか戦前・戦中がぶり返して来たのではないかと恐怖を感じる。

今は言論自由の世の中ということになっているけれども、うっかり自由な発言をしたら、かなり大きなスケールで、非国民呼ばわりをされるのではないだろうか。

たとえば、かつて国民が、片言隻句をとらえられ、意識的、無意識的に非国民呼ばわりされたように、武者小路実篤さんは『沖縄問題二十年』の中で糾弾されているのではないだろうか？　同書の著者は、沖縄問題で盛りあがった世論を千島問題の方向に誘導しようとする政府の意図のお先棒をかつぐような発言が、すでにあらわれていたとして、武者小路さんが「日本経済新聞」に書いた文章を持ち出している。「……今日本では沖縄の問題が一番大問題となっている。……自分は沖縄の問題に千島の人のことを考えるのはよくないと一方思うが、しかし沖縄のことが問題になればなるほど、問題に少しもならない千島の日本人のことが同時に気になり、その人達が幸福であること

を望むのはやむを得ない事実である。……しかし千島の人に比べて、沖縄の人は言いたいことが言えるだけ仕合わせだと僕は今言いたくない。……沖縄のことを思う人が多ければ多いほど、誰にも顧みられない千島の人のことを思い出すのも、今思い出すのはよくないと言う人もあるかと思うが、僕は思い出さないわけにはゆかない」（一九五六・六・二九）

武者小路さんのこの発言のどこが悪いのか私にはわからないけれども、沖縄復帰運動をしている人たちや、反戦平和運動などというのをしている人たちからは、たぶん排斥されるだろうと思うのである。そして、そういう人たちの数が、それほど多くはなく、それほど権力が強くもないから、武者小路さんは、『沖縄問題二十年』で困った人物として引用されるにとどまっている。しかしもし、これだけの感想文が政府のお先棒に結びつくという論法がまかり通るなら、数と力の推移で、武者小路さんは、いつ非国民にされてしまうかわからないのである。私もまた同様だろう。

臆病な私にとって気がかりなことは、沖縄には、私をハンドーと言って排斥する人も少なくあるまいということであった。もちろん私には、政府のお先棒をかつぐ気は毛頭ないが、私の語彙の中に、ジコヒハンだとかハンドーだとかという言葉はない。私に通じない言葉を一方的に使って、私を排斥する人たちがあらわれたら、私はどのような言葉を使って会話をすればいいのだろうか？

そんなことを考えていると、自分の才能や何が書けるかといったようなこととは別の不安も生じて来るのである。

結局、案も立たないうちに、那覇に着いた。

大阪から乗ったのだが、大阪も雨、那覇も雨だった。

小型タクシーで、空港から沖縄ホテルに向かう。神風運転であった。あとで市街図を買ってみたら、そこが近道なのか、混まないからか、細い道から細い道へと抜けたようだ。国際大通り裏の市場の一角だったかもしれない、低い屋根の店先に、青果がこぼれるばかりに積み上げられているのが目についた。

ホテルに着くと、まず昼寝をすることにして、ベッドにもぐり込んだ。そして、布団の中で考えた。とにかく、やたらに人と会って、話をすることだ。初対面の人と、どれほどの話ができるかわからないけれども、取材者として質問するというふうにではなく、せいぜい隣人にでもなったつもりで気楽に雑談してみることだ。

しかし、やはり話は、質問のかたちになってしまう。私はそば屋に入れば、そば屋のおばさんに話しかけ、タクシーに乗ればタクシーの運転手さんに話しかけた。

「おばさんは、自衛隊が来るのはいやですか？」

「自衛隊ですか、来たほうがいいですよ」

と、そば屋のおばさんは言った。

「自衛隊の進駐は、戦争につながる、とは思いませんか。沖縄の人たちは、そう言って反対しているんでしょう」

「そういうことを言っているのは、一部ですよ。カクシンが言っているだけさ」
「米軍の基地は、早くなくなりゃいいと思う？」
「そりゃね。沖縄は基地ばかりですよ。コザの方には行ってみましたか？」
「まだ。これから行ってみようと思ってる」
「行ってごらんなさいよ。沖縄に基地があるんじゃなくて、基地の中に沖縄があるといいますが、ほんとですよ。でもね、アメリカのおかげで、みんな生活がよくなったのさ。とくに食生活がね。チーズやバターが簡単に食べられるようになったんだから」
「じゃ、あったほうがいいわけ？」
「いいもわるいも、基地はなくなりませんよ」
　五十年配のおかみさんはそう言ったが、二十歳ぐらいのウェイトレスは、自衛隊には来てもらいたくない、アメリカは早く帰ってほしい、と言った。円の切り上げで収入が減っても、今はそういうことを言ってはいられない、とにかく祖国に復帰して、しゃっきりした気持になって再出発すればいいのだ、と言った。
「返還協定批准反対って言っている人たちがいるでしょう。あなたはどうですか、こういうかたちでも、早く復帰したほうがいいと思うのですか、それともこういうかたちではいけない、こういう条件では復帰しないほうがいいとは思わない？」
「復帰することが先だと思います。復帰が早ければ、それだけ出発も早くなります」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.